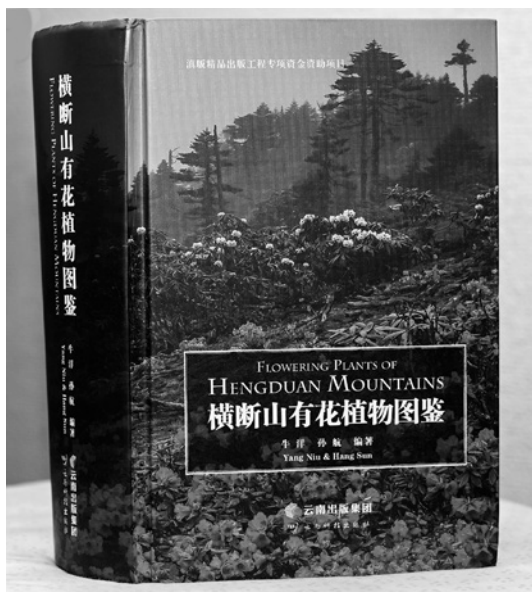


## 書評 Book Reviews

□牛洋・孫航(編著):横断山有花植物図鑑 Yang Niu and Hang Sun: **Flowering Plants of Hengduan Mountains** A5版. 929 pp. 2021. 云南出版集団 云南科技出版社. 昆明. ISBN 978-7-5587-3266-9.

本書のタイトルで「横断山」とされている横断山脈は中国雲南省の西部で南北方向に並行して連なる大山脈であり、北はチベットと四川省にかかっている。稜線には4,000mを超える山が連なっており、ミニアコンガ山7,556mが最高で、山脈の間には怒江、瀾滄江、金沙江など南下する深い渓谷があるため、様々な環境があり、植物相もきわめて多様性に富んでいる。本書の前言では227科2,264属12,000種を超える種子植物があり、固有植物は90属3,300種類を含むとしている。本書は前言でごく簡単に研究史をまとめているが、それ以外は図鑑に徹しており、APG分類体系に従って120科1,857種の被子植物を収載している。見開きの左ページに植物解説、右ページに写真がある。植物解説は中国語と英語の併記で、科の名前(学名)と特徴の簡潔な記述、各種についての名前(学名)、花期、垂直分布の範囲、形態的特徴、生態、分布域が記載されている。学名の後に、同定の基準となった文献が番号で示され、巻末にそれらの文献39件がまとめられているのは特筆される。写真から、いわゆる絵合わせで仮同定を行い、類似種と比較して厳密な同定に進むのに役立つことまちがいない。写真は1種について複数掲載されているものが多く、特徴がうまく示されている。紙質によるのか、写真のアンダーな部分がつぶれているのが残念である。ページをめくりながら、収載されている種類をざっと見渡すと、特に珍しい種類を集めたというよりは、よく見る種類が選ばれているという印象を受ける。私が雲南省での調査で撮影した種類とかなり重なっており、本書と見比べて写真撮影した植物、ひいてはその標本を同定するのに便利だと感じた。版形も大きくないので、現地に持って行って、見た植物の名前をチェックするのも有効であろう。

本書を見ると、管開雲/魯元学【著】/邑田仁【監修】/李樹華【訳】『雲南花紀行—8大名花をめぐる旅』2003年、B6版303pp. 国際花と緑の博覧会記念協会発行、を思い出す。コンパクトであり日本語で利用しやすいことはもちろんだが、植物



紹介には実物を見たくするような魅力的な437種類の野生植物が選ばれており、特に雲南省の植物に精通した著者らの現地案内「第1章 雲南、花を見る旅」が秀逸で、各地の見所が適確に解説されている。現地に行ってから、さて明日は何を見にどこに行こうか、と計画を立てるのに今でも大変役立っている。

これら2冊を手には、再び雲南省を訪ねることができる日が待ち遠しい。

(邑田仁 Jin MURATA)

□種生物学会(編)、川北篤(責任編集):種生物学研究 第40/41号、**花と動物の共進化をさぐる** Atsushi KAWAKITA, The Society for the Study of Species Biology (eds.): **Shuseibutsugaku-Kenkyu No. 40/41, Exploring Coevolution of Flowers and Pollinators** A5版. 255 pp. 2021. 文一総合出版. ¥2,700 + 税. ISBN 978-4-8299-6208-4.

進化という用語はすっかり定着し、生物のみならず広く様々な事柄について方向性をもった変化の表現に使われるようになってきている。共進化という用語も間もなくそうなるであろうアトラクティブなものである。本書は雄しべから雌しべに花粉が運ばれる送粉(ポリネーション)に関する、花と動物の共進化をテーマにまとめられている。第1章「総論 送粉者を通して見る花の多様性」ではポ



リネーションにどのようなパターンがあり、花と動物が互いにどのように関与しているかという概略が、主に日本の野生植物について紹介されている。以後の各章は送粉に関する花と動物ポリネーターの関係の実例で、それぞれの専門の研究者により、研究の動機や手法とともに解説されている。

各章に副題があるが、筆者なりに理解したところでは、第2章はフェロモン類似物質により甲虫(ハナムグリの1種)の雄を誘因してポリネーションを行うボウラン(ラン科)について、第3章はテンナンショウ属(サトイモ科)の種間隔離の要因として注目される、ポリネーターの誘引の仕組みと多様性、第4章はツリガネニンジン(キキョウ科)の送粉は主にガによって夜間に行われるという発見、第5章はキノコバエという目立たない昆虫をポリネーションに利用する花の多様性、第6章は花粉塊をもつサクララン(キョウチクトウ科)の花の構造とポリネーションの特徴、第7章はポリネーターに提供するためにある花の蜜をアリに盗られないようにするための、ツルニンジン属(キキョウ科)やコバイモ類(ユリ科)の花冠の仕組み、第8章は本来オオコウモリをポリネーターとするウヅルカンダ(マメ科)が、オオコウモリがいない地域でどのようなポリネーターを獲得しているか、第9章は小笠原など大洋島における、異型花柱性を維持している植物の発見、第10章は広く植物の防衛に関わることが知られるアリの行動とポリネーション、そのほかに4つの興味

深いコラムがある。筆者が研究するテンナンショウ属についてはもちろんだが、それぞれのテーマについて自分がその研究者であるかのように親しみを持って読むことができた。大学院生の頃に琉球に植物採集に行き、ウヅルカンダを含むトビカズラ属の萼筒にハート形の爪痕がついているのを見て、これがオオコウモリの爪痕で、油臭いような特殊な臭いに誘われたオオコウモリが花粉をつけているに違いないなどと想像を廻らせたことをなつかしく思い出す。

人間の好奇心と自然の間にも共進化があると、いっていいだろう。自然現象の中に誰かが新しい事象を発見すると、それに関連した事象が次々と明らかになり、このことが新たな探求を呼びかけとなる。それによってまた新しい事象が発見されるという連鎖である。どんな小さな発見であっても、それがきっかけとなって驚くべき発見に発展する可能性があるということを、本書が教えてくれるようだ。本書を読むと、初心者から熟達者までさまざまな段階で、常に新鮮な好奇心を持って進化を続ける執筆者らを応援したくるとともに、自分たちもその輪に連なって楽しく過ごしたいという気持ちになるだろう。

巻末に種生物学会の紹介があるが、学会誌についての紹介があってもよさそうだ。「種生物学研究」の第1号『種生物学研究I』は1977年に植物実験分類学シンポジウム準備会から、第29回シンポジウムのまとめとして発行された。(その記事の最初の著者は国立科学博物館植物研究部におられた館岡亜緒氏で、1976年に国立科学博物館に設置された「筑波実験植物園」のネーミングが似ているのは興味深い。)その後「種生物学会」が設立され、英文の学会誌 *Plant Species Biology* が1986年に創刊されてからも、「種生物学研究」は継続し、2000年からは本書と同サイズの市販の単行本シリーズに姿を変えて発行されている。内容は深いですが、取りつきやすいように説明が工夫されている。表紙カバーのデザインも大いにそれを助けており好感が持てる。

(邑田 仁 Jin MURATA)